

新出本『十二門論疏』について

石井公成

一 『十二門論』研究の歴史

『十二門論』については、梵文もチベット訳も発見されておらず、現代の学界では龍樹撰を疑う説が有力である。⁽¹⁾ 中国でも、早い時期から著者に関する異説があったようで、吉蔵(五四九—六二三)は、その『十二門論疏』において、

有人言。十二門論偈是龍樹所造、長行還是青目所注。

(大正四二・一七六上)

と述べ、龍樹が造つたのは偈の部分のみであつて本文は青目の作とする説を紹介している。ただ、吉蔵はこの説を否定してすべて龍樹の作と主張しており、中国・朝鮮・日本の伝統的な仏教学においては、偈も長行ともに龍樹の作として扱われてきた。そして、『中論』ほどではないにせよ、研究が積み重ねられ、注釈もかなり作られていたことは、吉蔵の『十二門論疏』が「十二門師」「関中旧釈」「有人云」などの形で自

らの系統の解釈や他の学派の説に言及していることから知られる。「十二門師」と明示された説以外については、『中論』『百論』その他に対する解釈を転用したものも含まれていようが、明らかに『十二門論』に対する注釈と思われるものも少なくない。吉蔵は「観性門」中の「汝今聞世諦謂是第一義」の箇所を釈する際は、

十二門師多云。聞論主說世諦謂是第一義故、仮安我字。今明不然。文無我字。又論主何処說世諦彼謂是第一義耶。故謬釈文也。復有人言。外人聞說不生不滅等世諦謂是第一義諦。此転謬也。……

(大正四二・二〇六中)

と述べている。すなわち、「十二門師」と呼ばれる『十二門論』の注釈者たちの多くは、「聞論主說世諦謂是第一義」という部分を、龍樹自身が「世諦こそが第一義諦にはかならない」と説いたものと見、だからこそ龍樹が「我は」と説いていると

解釈するのに対し、吉蔵は「世諦こそが第一義諦にほかならない」と思うのは『十二門論』が批判している相手であり、『十二門論』のこの前後には「我」の字などないことを強調するのである。吉蔵はさらに、この部分について、愚人が「不生不滅等の世諦を聞きて是れ第一義と謂う」ことだと解釈する説があることを紹介し、過ちのいっそう甚だしいものとして詳細な批判を展開している。つまり、吉蔵当時、『十二門論』に関する議論は盛んだったのであり、特に六朝以来、大きな問題となっていた二諦の解釈との関連において諸説があったことがわかる。なお、吉蔵は右の引文の前の部分と後の部分では、三無性を第一義と見る説を批判しているほか、他の箇所でも『撰大乘論』を重視する人々の説を批判しているため、北地で『撰大乘論』重視の風潮が強まるにつれ、唯識思想と中観思想の関係も問題になってきたことが知られる。

ところが、吉蔵以後、『十二門論』研究は下火になったようである。興福寺永超『東域伝灯目録』は、『十二門論』に関する著作として、

十二門論疏 一卷 吉蔵

同略疏 同上

同論疏 一卷 曇影

同論疏 二卷 元康

同論疏 二卷 珠師
 同論疏 一卷 法蔵仁安寺南岳
 同論疏玄義 一卷
 同論疏 一卷 峨帽山惠亮
 同論疏翼賛鈔序 一卷

（大正五五・一一五九上中）

をあげているが、吉蔵の著作をのぞけば現存しないものばかりであり、これらの著者についても不明な点が多い。

まず、曇影については、羅什の弟子であり、『中論疏』を著した曇影と見てよいだろう。吉蔵が同書を「関中」の古疏としてしばしば引用していることは、よく知られている⁽²⁾。

元康は、いうまでもなく、『肇論疏』で有名な唐代の三論師の元康を指す。

次の珠師は、琛師の誤植であるため、『中観論疏』を著し、吉蔵によって北土三論師と称された瑤法師のことと思われる⁽³⁾。

「法蔵仁安寺南岳」という注記については不明である。『十二門論宗致義記』を著した賢首大師法蔵（六四三―七二二）とは別人である可能性が高いが、僧伝などには、賢首大師を除いては『十二門論』の注釈を著したと伝えられる法蔵は見当たらない。

「蛾眉山惠亮」も不明だが、『中論疏』や『十二門論注』を著し、周顥との交友で名高い智琳（四〇九—四八七）の師であつて広州に流された惠亮（道亮⁴）とは別人であり、おそらく唐代の僧と思われる。

このように不明な人物が多いのも、『十二門論』の研究がすたれ、これらの諸師の注釈が失われてしまったことが原因であらう。『日本比丘田珍入唐求法目錄』では、

十二門論疏 一卷

十二門論疏玄義 一卷

十二門論疏記 上

（大正五五・一一〇〇中）

とあつて小部のものが三部録されているのみである。このうち、『十二門論疏記』は、『仏書解説大辞典』によれば、上記の蛾眉山惠亮の注釈を上下二巻に開いたもののうちの上巻であるらしい。⁵ こうした注釈を日本に将来する際は、当時世に行なわれているもので日本には無い文献を持ちかえることが多いため、おそらく唐代のものであらう。このように、中国では『十二門論』研究は衰退していつており、高麗義天の『義天録』に至つては、

十二門論疏 一卷 法蔵述

（大正五五・一一七七上）

を挙げているにすぎない。

新出本『十二門論疏』について（石井）

日本の三論宗においても、研究はあまり活発でなかつたやうである。三論宗は、国家に保護されて育成された学派でありながら、平安の初め頃は有力であつた法相宗に転じる者が多かつたことはよく知られているが、『十二門論』研究がさほど盛んでなかつたことは、元興寺安遠の『三論宗章疏』が、

十二門論疏 二巻 吉蔵述

十二門論略疏 一卷 吉蔵述

十二門論疏 二巻 元康述

（大正蔵五五・一一三七下）

と記するように、僅かな書物しか保有していないことから知られる。

これまで述べてきた以外の注釈としては、正倉院文書中に、

十二門論義疏 一牒

（大日本古文書・正倉院文書」第十七巻一三二頁）

と見えている。

また日本僧の撰で現存する文献としては、吉蔵の『十二門論疏』の抄出ないし末帙である順憲『十二門論鈔』上巻、尋恵『十二門論疏抄』、義範『十二門論疏挙要』、蔵海『十二門論疏聞思記』、『十二門論疏問答』（著者不明）があり、法蔵の『十二門論宗致義記』の注釈である宜然『十二門論宗致義記玄談（十二門論宗致義玄談）』などが残されている。すなわち、日本僧による『十二門論』自体の注釈は存在せず、吉蔵や法蔵

の注釈の抄出ないし末釈のみが著されているのである。これは、三論宗・華嚴宗などの日本の宗においては、所依の経論そのものに新たな立場から取り組んで研究しようとする姿勢がなく、宗祖たちの著作を習い伝えるだけになっていったという事情を反映していよう。

二 東大寺図書館本『十二門論疏』

こうした状況の中で、『十二門論』そのものの注釈として注目されるのが、東大寺図書館が所蔵する写本『十二門論疏』一卷（二二三函五一号）である。同写本は、袋綴の冊子本であって巻首と裏表紙を欠いており、縦二四・七センチ、横二〇・五センチ。五十三丁。界は無く、毎葉十一十一行、一行十七―二十三字で書かれている。複数の手による書写であり、末尾には「十二門論疏一卷」とある。全般に虫損があり、僅かながら判読できない箇所もある。訓点はごく稀に見られるのみである。

『国書総目録』では、本写本を「十二門論疏注釈」と称しており、鎌倉時代の成立としている⁶。書体や返り点の書込みからして、日本で写されたことは間違いないが、「免」を「勉」に作り、「復」を「覆」に作るなど、敦煌写本など中国の写本に見られる同音による通用字の類が多く、またそうした写本によく見られる俗字が散見されるため、もとの写本はおそらく

く中国で成立したものと思われる。前半が楷書で丁寧にかかれていたのは、おそらく原本に近い形で書写しようとしたのであろう。中半からは線の細い丸みを帯びた書体でかなりの早さで写されており、以後、何度か書体が変わっているが、その中には同一人による場合と、筆写者が変わっている場合とがあるように見える。これらの書誌的な点に関しては、稿を改めて論ずることにしたい。なお、以下の引用では、特に必要な箇所をのぞいては、漢字は通行の字体に改めた。

同写本は、巻首が欠けているが、「則ち、空有双つながら絶す。此れは是れ『論』の大体なり。凡そ立論の大意は」という概説の文章で始まり、十二門の構成、『十二門論』という題名の説明、著者である龍樹に関する説明などが続いているところから見て、欠けているのは最初の一丁のみか、多くても数丁程度であろうと思われる。吉蔵疏のように、僧叡の序に対する注釈もなされていたならば、その分も欠けていることになるが、その場合でも、量はさほど多くないだろう。

三 新出本『十二門論疏』の構成

東大寺図書館本『十二門論疏』（以下、新出本と称する）の特色は、きわめて素朴であることである。分科は簡略であるうえ、諸経論の引用もごく僅かにすぎない。中国における諸説の紹介も見られず、僧叡・僧肇らの羅什門下と違って老莊

思想の強い表現もほとんど見られない。『涅槃經』や『法華經』の思想と結びつけようとする吉蔵の特異な解釈や、吉蔵がしきりに批判している地論師・摂論師の教学も見いだせないうえ、真空を強調して清弁・護法の対立を会通しようとした法蔵の影響もなく、玄奘以後の新訳の用語も用いていない。一方、観有果無果門や観縁門においては、批判相手の阿毘達磨の教理について、詳細な吉蔵疏以上に詳しく説明している部分もある。これらの点から見て、新出本は、法朗・吉蔵系統の三論宗以外の人の手によって、吉蔵以前の時期に作成されたことが推測される。阿毘達磨の教理を重視しつつも「諸法実相・畢竟空」を大乘の根本とみなして大乘の意義を強調し、『十二門論』を観法の手引きとして無執着の立場で観を修してゆこうとする新出本は、これまで知られていなかったタイプの『十二門論』の受容のあり方を示すものとして、きわめて貴重なものと言うことができよう。以下、その構成について簡単に紹介することにする。

先に触れたが、新出本は巻首が欠けており、以下のように文章の途中から始まっている。

則空有双絶、此是論之大体。凡立論大意、将令学者修而不証、觀而不著、為而不有、捨而不無。雖復指事以明理、々明而事喪、藉言以顯義、々顯而言亡。既理事而泯、言義双尽、無復絀豪於其間。但衆生為塵風所飄、随流忘返、滯惑難除。非一

新出本『十二門論疏』について（石井）

門可遣、展転相乘、遂至十二。其十二是何。初是因縁門。二有果無果門。三者縁門。四者……

（二丁右）

すなわち、『十二門論』は、学ぶ者を「修して証さず、観じて著（着）さず、為して有らず、捨てて無ならず」という無執着の立場で修行させ、また具体的な事象や言葉による説明によって空などの理義を示しつつも、事象や言葉とそれによって示される理義とをともに離れた立場に立たせることを目的としているというのである。これは、

又我師興皇和上、每登高座、常作是言。行道之人、欲捨非道求正道者、則為道縛。坐禪之者、求息乱求静、為禪縛。復云、習無生觀、欲破洗有所得心、則為無生縛。並是就縛中欲捨縛耳。而実皆不知是繫縛。

（吉蔵『浄名玄論』卷三、大正三八・八七四中）

とあるように、修行しようとしてかえって修行に縛られてしまう危険性について、高座に登るたびにきびしく警告したという興皇法朗の主張に通ずるものがある。

なお、「復た豪を其の間に絀す無し（無復絀豪於其間）」とは、理と事の間、言と義の間に細い毛を入れるほどの隙間も無いの意であろう。智琳『中論疏』が、

又真理絶相、言行斯断。豈容空有於其間哉。

（安澄『中論疏』、大正六五・七一上中）

と述べ、曇影『中論疏序』が、

内外並冥、緣智俱寂。豈容名教於其間哉。

（『出三藏記集』卷第十一、大正五五・七七上）

と述べていることから見て、早い時期からこれに類した表現が決まり文句になって流行していったことが知られる。新出本は、そうした言い回しを利用したのであろう。

新出本は続いて、

但衆生、為塵風所飄、随流忘返。滯惑難除、非一門可遣、展轉相乘、遂至十二。

（二丁右）

と述べ、「衆生、塵風に飄され、流れに随いて返るを忘る」と説いているため、客塵煩惱の思想を知っており、「還源」志向が見られることが注意される。ただ、こうした趣旨の言葉が見えるのは冒頭のこの部分のみであり、随処で『涅槃経』を引いて仏性という源に戻るべきことを強調する吉蔵ほどは還源志向は強くない。

以下、新出本は、十二門の名を列挙し、『十二門論』の題目を釈し、さらに龍樹菩薩に関する説明を続けている。そして、「造論因縁」については「別伝に出づ」として説明を譲ったうえで、以上のような理由で「十二門論觀因縁門 第一龍樹菩薩造」と名付けるのだとしているが、「別伝」とは鳩摩羅什訳『龍樹菩薩伝』のことであろう。

十二門の一々の門の構成については、三つの部分に分かっており、その門の最初の偈の前でその門のテーマを述べた部分を「標宗分」、諸偈とその説明部分を「開觀門分」、そして各門の末尾で諸法が空であることを強調した部分を「結成分」と称している。そして、觀因縁門では大乘を示すのを目的としているため、最初の部分で「摩訶衍を宗と為す」ことを明言し、ついで問答によって「觀門」を開き、最後にこの門の内容を結成すると述べ、さらにこの論に帰敬偈がないことについて、「此の論は余部に出ず。更に別に明さず」という。すなわち、『中論』のような主著と違い、補足的なこの『十二門論』には帰敬偈は付けていないのだとするのである。

以下、觀因縁門の本文の注釈に入ってゆくが、觀有果無果門の冒頭で、

有果無果門者、此門則以能破為名。

（十四丁左）

と述べているように、以下の十一門においては、それぞれ冒頭で、「能破（批判側の主張）」、「所破（批判される対象）」の観点から門の名について簡単に説明したり、来意、すなわち、個々の門がその位置で置かれて説かれている理由について簡単に説明したりしている。その説明は、吉蔵疏に比べ、きわめて簡潔である。

四 新出本『十二門論疏』の特色

(a) 観の重視

新出本が観を重んじていることは、個々の門の構成について述べる際、中心となる偈と本文の部分を「開観門分」と規定していることも明らかだが、こうした姿勢は、題目解釈にも見ることができる。新出本は、(1)『十二門論』という題名、(2)造者の龍樹菩薩、(3)「観因縁門第一」という品名、について順次に解釈してゆくのではなく、次に見るように、「十二門論観因縁門第一 龍樹菩薩造」という形のテキストについて釈している。見やすくするため、項目ごとに改行しておく。

其十二是何。初是因縁門。……

言其門者、寄喩為名。如世間門有其二義。一則顕物。二則通人入路。今明聖者用此十二偈句、破諸法相、令理顕彰、能通行心、入於空理。故名為門。

論者、直言曰説、問答曰論。但至理難明、非直言所究、仮問答顯理、故名為論。

観者、細心推宗、名之為観。然非観無以通心、非論無以便理。故観達於心、論宣於口者、蓋因言語以通理、理通則名葬、達於心者、細心以推、宗窮則相尽。相尽則心寂、名葬則言離。是則名相外忘、心行内息、境智俱泯、一味平等、無異無分別。

新出本『十二門論疏』について(石井)

故名為観。

因縁者、然方法所因、似各有地、推而究之、実自無性。故名

因縁。

門義如上。

釈第一者、有十二因縁、逮初故云第一。

龍樹菩薩造者、出造論人。……

(二丁左—二丁右)

すなわち、新出本は、『十二門論』の造者である聖者はこの十二偈句によって固定的な法相を否定し、理を明らかにして修行者の心を空理に入れさせるため「門」の譬喩を用いたのであり、難解である至理を理解させるために、ただ説明するだけの「説」でなく、問答形式の「論」を用いたのだとしたのち、「観」の説明に移り、「心に達する」観と「口に宣ぶる」論の違いを説くのである。

一方、吉蔵『十二門論疏』冒頭では、

第一釈名門者、論名有三。一者十二、二者門、三者論。

(大正四二・一七四)

と述べ、「十二門論」という題目を「十二」「門」「論」の三に分つて解釈しているにもかかわらず、「十二」と「門」の説明に続いて、「論」ではなく、次のように「観」の説明が挟みこまれていく。

次明観義。所言観者、正観也。是照達之名。略有三義。一者

檢有所得邪因縁不可得故、名観因縁。此是所破義也。二者照達仮名正因縁故、名観因縁。此明所申義。三者観因縁無自性、即是実相故名観。前二義即是実惠方便。後一是方便実惠。故所観即二諦、能観名二智。問。此応是論因縁、云何名観因縁耶。答。観弁於心、論宣於口。故称論為観。此是吐論主観心、以示於物、名観也。又論主不欲直口言説諸法是空。若口説空者、此是口為説空行在有中。今観悟因縁空故、言観因縁耳。又此是正観審諦了達因縁畢竟空。簡異邪見闡提撥於因果。故言観因縁也。

（大正四二・一七五下—一七六上）

このため、『国訳一切経』の注では、十二門論の題名を三分してその門を論ずる際に、何故に観を茲に説明するのか不可解である。

（論疏部七、『十二門論疏』注四〇、三六一頁）

と述べているが、「門」の説明のところで「能通行心、入於空理」と説き、「観」を意識した説明をする新出本と似た主張をしている注釈を参照し、その影響が残ったと見れば理解できよう。吉蔵の「観は心を弁じ、論は口に宣ぶ（観弁於心、論宣於口）」という句は、「観は心に達し、論は口に宣ぶ（観達於心、論宣於口）」と説く新出本とほとんど同じである。これはおそらく決まり文句として、早くから流行していたのであろう。

『中論』を『中観論』と称するように、三論宗が三論を觀の書としてとらえようとしていたことはよく知られているが、法蔵の『十二門論宗致義記』によれば、題名を『十二門論』ではなく、『観十二門（論）』とするテキストもあったという（大正四二・二一九上）。宗祖の注釈を解釈するだけのものになっていった後代の日本の三論宗と違い、新出本の作成当時にあっては、『十二門論』研究は観の実践と結びついていたことに注意すべきであろう。

新出本の場合、その観の内容は、

解釈空当十二門入者、此句惣生下第二観門分。然大乗之体、以空為宗。深難悟入、必由門故、云当以十二門入於義也。

（十一丁右）

と明言しているように、大乘の根本は空であることを強調したうえで、十二の側面から空を観せしめようとするものであり、吉蔵が空を説きつつも空とは中道仏性であるとして、如来蔵思想の面を強く打ちだしたのは姿勢が異なる。ちなみに、新出本には、仏性・如来蔵の語は見えず、中道の語も一度しか用いられていない。

(b) 大乘の定義

『十二門論』は観因縁門の冒頭において、「今当に摩訶衍義を略解すべし」と述べているが、新出本はこの「摩訶衍」に

ついで次のように説いている。

摩訶衍者、天竺正音、此云大乘。正指出宗体、以諸法実相畢
竟空為大乘也。問曰。実相畢竟空、離四句、言語道斷、心行
所滅。云何可名大乘。答曰。仏法有二門。一世諦門、二第一
義門。今就世諦門中、明聖人善巧為諸衆生以無名相法作名相
説。故以実相空為乘体、万行為乘用。

(四丁右)

すなわち、『十二門論』は大乘を宗としているとし、「諸法実
相畢竟空」を「宗体」とすると説くのである。多義を含む言
葉、特に根源的で力に満ちたものであることが強く意識され
る言葉については、漢訳にあたって意識でなく音写が用いら
れることが多いが、ここでの摩訶衍(mahayana)も同様の例
である。新出本は、摩訶衍でなく大乘という訳語で通してい
るが、大乘の真実の姿を分別の世界を離れた第一義諦のあり
方に見出し、「諸法実相畢竟空」などの言葉については世諦に
よる表現として、「無名相法を以て名相と作して説いたもの
と見るのである。この辺りは、『老子』の「強いて名づける」
という思想と共通する面もあるが、僧肇や僧叡などと違い、
老荘思想があまり出ていないことが注目される。なお、吉蔵
は、『十二門論疏』では、涅槃について、「名相無きも強いて名
相もて(涅槃と)説く(無名相強名相説)」（二八〇下）と述べ
ており、『老子』の影響が感じられる。

新出本『十二門論疏』について(石井)

「諸法実相畢竟空」という点を強調するのは、鳩摩羅什以
来の伝統であろうが、新出本では、右の大乘に関する説明に
続けて、

問曰。経説、十方無碍人、一道出生死。或言、但有一乘法。
今以実相為大乘者、乘道為同為異。答。有通有別。実相平等
為心、遊履名之道、合道万行造趣運通名為乘。

(四丁左)

と述べている。つまり、『華嚴経』明難品の「十方無碍人、一
道出生死」の句(大正九・四二九中)と、『法華経』方便品の
「但有一乘法」(同、八上)の句を大乘の典型として引き、「乗」
と「道」との同異について説明し、実相平等を究極の目的と
しつつもそこに至る「道」の多様性を認め、複数の「乗」の
存在を認めるのである。「十方無碍人、一道出生死」の句は、
吉蔵も好んで引用する句だが、『涅槃経』の影響に基づいて仏
性説を強く打ちだし、空・中道・仏性などの立場を会通しよ
うとする吉蔵と違い、新出本では仏性・如来蔵に言及してい
ない。『華嚴経』、『法華経』の引用にしても、「諸法実相畢竟空」
が根本の体であるとされる大乘の「乗」の概念との関わり
の中で、「一道」「一乗」の語が着目されて引かれたものであり、
その「一道」「一乗」が『華嚴経』や『法華経』においてどの
ような意義で用いられているかに関する詳しい考察はない。

右の『華嚴経』、『法華経』以外の經典の引用としては、般若

經の僅かな引用をのぞけば、「大乘」の「大」を釈す際、

今执人弁用、則乘通因果。在因則増進、在果満足自徳。既満用不善成、巧用無過故、名為大。故經云、我大涅槃船周復往返濟度衆生也。

（八丁右）

と述べて『涅槃經』を引いている箇所がひとつあるにすぎず、ここでも新出本は仏性を強調しようとはしていないのである。右の引文には字句の乱れがあるようだが、「經」とは、『涅槃經』卷九・如来性品が、

譬如大船、從海此岸至於彼岸、復從彼岸還至此岸。如来応正遍知亦復如是。乘大涅槃大乘宝船、周旋往返濟（度）衆生。

（曇無讖訳『涅槃經』卷九、大正一一・四二〇下）

と説いている箇所を指そう。

なお、新出本の大乗の定義で重要なのは、「実相空を乗の体と爲し、万行を乗の用と爲す」とあるように、体用の概念が盛んに用いられていることである。「略」の語について釈した直前の部分でも、

若逐事弁乗相、則無辺。今但解一空則方法皆攝。以体収用、莫不帰空故、名空為略故。

（四丁右）

とあるように、空を理解すれば方法が理解できることに關して、「体を以て用を攝せば」と述べているほか、随處で体用概

念を用いて解釈しているが、その「体」はあくまでも実相としての空とされており、すべての現象を生み出す發生論的な本体とはとらえられていない。

なお、「乗」の解釈については、『大智度論』を用いているように思われるが、「論云」といった形にせよ、『大智度論』を直接引くところが、一箇所もないのは不思議である。

(c) 阿毘曇との親近性

『十二門論』は、空を理解しない人々の説を批判して空の真義を述べたものだが、新出本はその『十二門論』の解釈でありながら、有部やその他の学派に対する激しい敵意は見られない。とりわけ、觀縁門第三の解釈においては、四縁や六因そのものに関する説明を主としており、この『十二門論』の解釈を通じて仏教教理全般の入門としているような趣きがある。新出本において『中論』『百論』以外の論が引かれているのは、この觀縁縁門だけが、それらはことごとく『雜阿毘曇心論』卷第二の正確な引用である。以下、その引用と『雜阿毘曇心論』の出典を示しておく。

毘曇論云、謂同一行法 一依亦一時、及境界転、是説相応因。

（二十六丁左。大正二八・八八三中）

是故論云、当知共有因展転為因果。

（二十七丁右。大正同・八八三中）

是故、論云、前生与後生。亦説彼未生、自地相似因。或説於他地。

(二十七丁右。大正同、八八三下)

是故、論云、苦集於自地、疑見及無明、(説一切遍因)諸煩惱前起。

(二十七丁右。大正同、八八四中)

是故、論云、不善善有漏、三世之所撰、以彼有報因故、説名為報因。

(二十七丁左。大正同、八八四下)

故論云、從是六種因、縁転生有為法。

(二十八丁左。大正同、八八三上)

すなわち、この前後は『雜阿毘曇心論』の抄出に近いのである。一方、吉蔵は觀縁門における法相を釈す際は、『雜阿毘曇心論』についても二度言及しているが、『成実論』と阿毘曇の立場を批判的に論じ、「集師旧用」という形で先人の説を引くほか、「有人」の説も引きつつ、この觀縁門は「内」、つまり仏教内部の異説を批判していることを強調している。さらに吉蔵は、觀相門の釈中で「無窮」について論じる際、莊嚴・靈昧・開善その他の諸師の説を紹介し、『阿毘曇毘婆沙論』中の諸説についても詳説するなど、従来の研究を集大成した観があるが、新出本では『十二門論』が批判の対象としている立場については、「外人」の立場とするのみであって詳しい説

新出本『十二門論疏』について(石井)

明は与えていない。

五 結論

これまで述べてきたように、新出本が吉蔵の著作とは傾向がまったく違うことは明らかであり、おそらく吉蔵の疏を見ていると思われる。また、撰論師や地論師の教学も知らないか、少なくとも晩年の吉蔵のようにそれらの諸派を積極的に批判し、空觀と唯識との関係を明確しようとする意図などなかったことも間違いない。これらの事実、そして『大般若經』その他の新訳經論を引かず、新訳の語を用いていない事実は、新出本が唐初以前、おそらくはそのかなり前の成立であることを推測させる。『涅槃經』を引いているため、僧叡ら羅什の弟子の世代よりは後の世代の人物の作ということになるが、僧叡以後、吉蔵以前の期間において、どのような立場の学僧が新出本のような注釈を著す可能性があったか。吉蔵が激しく攻撃した南地の成実師の中には、三論を併習した者も含まれているが、梁代の有力な学僧であれば、細かい分科を用いたであろうから、その世代の人が新出本のような素朴な注釈を書くとは考えがたい。しかも、新出本は、『成実論』に言及しないのである。

新出本については、このように不明な点ばかりであるが、三論のうちの一つについて、吉蔵とはまったく異なる傾向の

注釈が完本に近い形で発見されたことの意義は大きいと言えよう。今後は、六朝における『成実論』や阿毘曇の研究動向との関係に注意しつつ、この新出本の訳注に取り組む予定である。

注

- (1) 安井広済『中観思想の研究』付録「十二門論は果たして龍樹の著作か——十二門論「観性門」の偈頌を中心として」、法蔵館、一九六一年。
- (2) 平井俊榮『中国般若思想史研究』、春秋社、一九七六年、一〇四頁以下。
- (3) 平井、同、二三四—二三八頁。
- (4) 平井、同、一八二頁。
- (5) 『仏書解説大辞典』第五卷、一八六頁d。
- (6) 『国書総目録』第四卷、二七二頁三段、岩波書店、一九六六年。
- (7) 「無復容穢豪於其間」などの写誤か。『般若経』類には、一切は空であって「無有毫末」であるといった表現はよく見られる。なお、敦煌の写本では、「毫」は「豪」に作るのが普通である。
- (8) 新出本では、すべて「樹」に作っている。この字も敦煌写本その他、中国の写本・碑文にはよく見られる。
- (9) 南本では、僅かに字句が異なる。大正一二・六六一上。
- (10) 「国訳一切経」では『梁高僧伝』卷八に見える惠集を指

すものと推測している。『国訳一切経論疏部七』十二門論疏卷中、四三九—四四〇頁。

〔本論文は平成九年度駒澤大学特別研究助成金(共同研究)による研究成果の一部である。〕